

「折れない、しなやかな心」を育てるために II

～レジリエンスを育む教職員の関わり～



親身な関わりを 日々

レジリエンスを育む教職員の関わりを検討するために、大学生に調査のご協力をいただき、135名から回答が得られました。

その結果、小学校・中学校・高等学校の頃に教職員から受けた、「見守ってくれる」・「わかりやすく導いてくれる」・「親身に関わってくれる」という関わりが、大学生のレジリエンスに関連していることが明らかになりました。また、大学生が感じている、過去に出会ってきた教職員の「よかった・印象に残っている」関わりとは、「親身に話を聞く」と「丁寧に関わる」であることも明らかになりました。

レジリエンスを育むためには、教職員の“親身な関わり”が大切であることが示唆されました。

(レジリエンスとは、自発的治癒力を意味し、一般的に「精神的回復力」や「耐久力」などと定義されています。)

レジリエンス

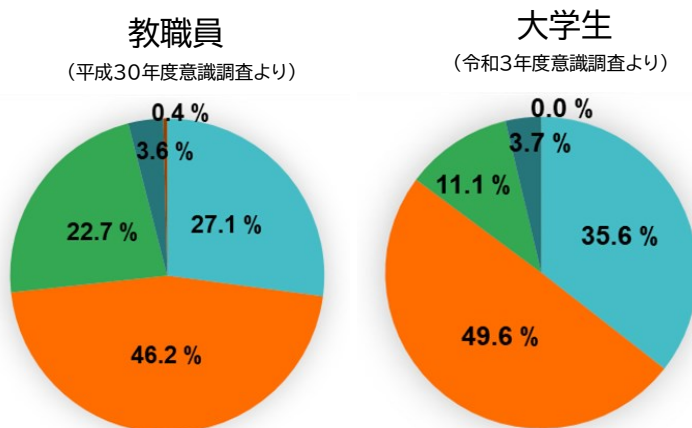
大学生への調査

親身な関わり

日本の子どもは

「自己肯定感」が低いと指摘されていますが、そう思いますか？

～教職員と大学生の意識調査の比較



■思う ■どちらかと言えば思う ■どちらとも言えない ■どちらかと言えば思わない ■思わない

大学生の方が教職員よりも子どもの自己肯定感の低さを実感している

レジリエンスを育む教職員の関わりとは

～大学生の調査から

わかりやすく導いてくれる

大学生のレジリエンス

自分への信頼

○楽観的に考える
○あきらめない
○自分には目標を達成する力がある など

他者への信頼

○相談できる人や場所がある
○愚痴を言い合える人がいる
○気持ちをわかってくれる人がいる など

見守ってくれる

親身に関わってくれる

大学生のレジリエンスが「自分への信頼」「他者への信頼」の2つから成り立っている

教職員の関わりが大学生のレジリエンスと関連している

学校生活において、教職員との関わりの中で「よかった・印象に残っている」ものがあると回答した大学生に、その時期と内容についてたずね、全校種で共通しているものと、校種ごとに特徴的なものをまとめました。

大学生が思う
「よかった・
印象に残っている」
教職員の関わり
とは

～全校種共通

成長とともに
変わっていく
教職員の存在と
関わり

～校種ごとの特徴

親身に話を
聞いてもらった

丁寧に
関わってくれた

以前の教職員意識調査では、“褒める”ことを重視
するという結果が出ていたけど、この2つが子ども
側の声として出てきたのは興味深いですね！
(平成30年度研究紀要 第8集)



後押しして
くれる存在

傍らでそっと

見守ってくれる存在

いつもそばに
いてくれる存在

小学校の時期

- ・一緒にいる
- ・クラスのつながりを
大切にする

中学校の時期

- ・話を聞く
- ・つかず離れずの
距離感で
- ・手間暇かける
- ・親身になる
- ・信頼関係を築く

高等学校の時期

- ・話を聞く
- ・受け止める
- ・親身になる
- ・雰囲気を感じる
- ・アドバイス・ガイダンス
をする
- ・考えを伝え合う
- ・性格を理解する

折れない、
しなやかな心を
育むための
教職員の関わり
とは

～まとめにかえて

大学生への意識調査から、教職員の“親身な関わり”が子どもたちのレジリエンス(特に「自分への信頼」)の醸成につながるということがわかりました。「親身になる」とは、“親”のように、そして“身(身体)”をもって全ての感覚を総動員して関わり合うこととも言えるのではないのでしょうか。その親身な関わりにより、子どもは尊重されていると感じ、自分を肯定的に捉え、また他者を信頼することにもつながっていくと考えられます。

ICT化が進み、物理的に時と場を共有しなくてもつながることができるようになりましたが、折れない、しなやかな心を育むためにはICTでは補えない関わりがまさに鍵になると考えられます。決して特別な関わりではなく、「親身に話を聞く」など、きわめて日常的で、温かみのある関わりの積み重ねが大切だと言えます。

こちらもあわせて
ご覧ください

「折れない、しなやかな心」を育てるために
リーフレット(教職員への調査編)



自己肯定感等に関する一考察
～「折れない、しなやかな心」を巡って～
(平成30年度研究紀要 第8集)



「折れない、しなやかな心」を育てるために
動画コンテンツ



「折れない、しなやかな心」を育てるために
～レジリエンスを育む教職員の関わり～
(令和3年度研究紀要 第11集)

